佐久市埋蔵文化財調査報告書　第２８５集

宮田Ⅱ遺跡

長野県佐久市瀬戸 宮田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

２０２２．３
佐久市教育委員会

例　言

1. 本書は、長野県佐久市が行う河川等土砂搬出場整備事業の瀬戸土砂搬出場整備工事に伴う宮田Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調 査 原 因 者　　佐久市役所　道路建設課
3. 調 査 主 体 者　　佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積　　宮田Ⅱ遺跡(SMT２)1800㎡
5. 所 在 地　　佐久市瀬戸2374-17　外４筆
6. 調 査 期 間　　令和２年11月４日～12月21日(現場発掘作業)
　　令和２年12月26日～令和４年３月(報告書作成作業)
7. 調 査 担 当 者　　冨沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

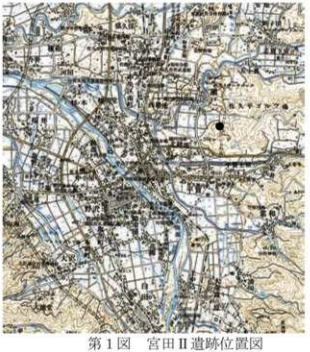
1. 遺構の略記号は、掘立柱建物址（F）・土坑（D）・溝（M）・畝址（U）である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

地山　　須恵器　　磨り範囲

発掘調査状況

目　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　　1．経過と立地
　　2．調査体制
　　3．調査日誌
　　4．遺構・遺物の概要
　　5．標準土層
　　6．調査の方法
第Ⅱ章　遺構と遺物
　　1．土　坑
　　2．溝状遺構
　　3．掘立柱建物址
　　4．畝　址
　　5．ピット
　　6．出土遺物
第Ⅲ章　調査のまとめ



第１図　宮田Ⅱ遺跡位置図

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

１．経過と立地

宮田Ⅱ遺跡は佐久市瀬戸に所在する。本遺跡は東側と西側が小高い尾根に囲まれた北側に開く谷状の地形で、谷部の標高差は約12mを測る。現況は畑地として利用されている。西側は、佐久市総合運動公園が地形を改変して大きく広がっている。

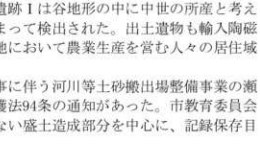
本遺跡の周辺は、各種開発により多くの発掘調査が行われている。特に、西側に近接する後家山遺跡や宮田遺跡、南に接する東久保遺跡では広範囲な発掘調査が行われ様々な調査成果が報告されている。

まず後家山遺跡は本遺跡の南側に広がる丘陵上に立地する遺跡で22000㎡の発掘調査が行われ、弥生時代後期(箱清水式)の竪穴住居址68軒、木棺墓２基等が検出された。特にいわゆる「小口式の組み合わせ木棺墓」からはガラス小玉54点とともに国内では初となる同種異形の鉄鉧がほぼ完全な形で発見され注目を集めた。また、焼失したと考えられる弥生時代住居址からは東海地方と共通する形態を持つ「曲柄装着平鍬」が出土した。市内において弥生時代の住居址から木製農具が出土する事例は今まで皆無で貴重な発見となっている。次に本遺跡と関連が深い宮田遺跡Ⅰ・Ⅲは、本遺跡と立地が同じ丘陵地形に挟まれた谷地形に広がる遺跡である。特に宮田遺跡Ⅰは谷地形の中に中世の所産と考えられる竪穴建物址、井戸址、集水坑、溝状遺構、畝址がまとまって検出された。出土遺物も輸入陶磁器類、土錘、土師質土器、石臼等があった。宮田遺跡Ⅰは谷地において農業生産を営む人々の居住域と生産域が同時に確認された貴重な遺跡と評価されている。

今回、遺跡内において佐久市道路建設課により災害復旧工事に伴う河川等土砂搬出場整備事業の瀬戸土砂搬出場整備工事が計画され、市教育委員会に文化財保護法94条の通知があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行った結果から遺跡の保護措置がとれない盛土造成部分を中心に、記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。

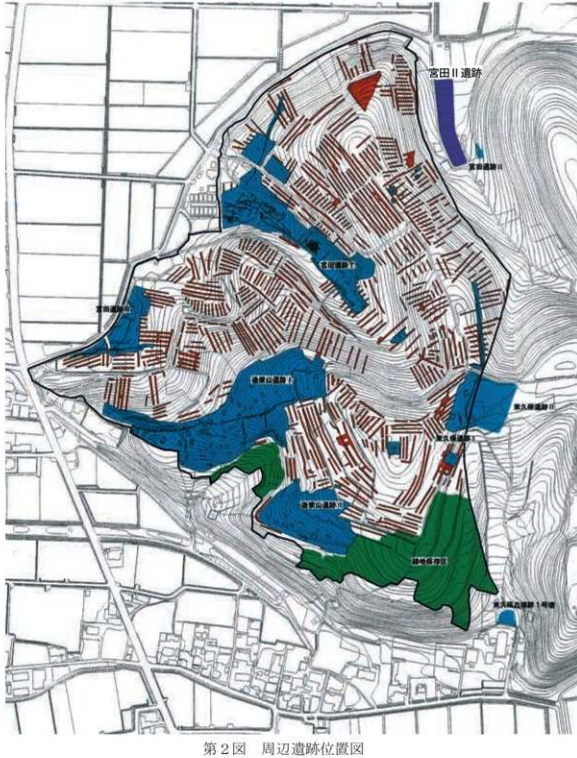
２．調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会		
	教　育　長	棚澤晴樹(令和３年５月)	
		吉岡道明(令和３年６月～)	
事　務　局	社会教育部長	三浦一浩(令和２年度)	
		土屋　孝(令和３年度)	
	文化振興課長	東城　洋(令和２年度)	
		平林照義(令和３年度)	
	企　画　幹	岡部政也(令和２年度)	
		谷津和彦(令和３年度)	
	文化財調査係長	山本秀典	
	文化財調査係	小林眞寿	羽毛田卓也
		冨沢一明	上原　学
		久保浩一郎	
	調　査　員	浅沼勝男	小林妙子
		依田好行	中澤　登
		橋詰勝子	橋詰信子
		松本仁宣	高野園美
		箕輪由紀	堺　益子
		柳澤孝子	堀篭保子
		堀篭まゆみ	



勾玉・管玉・ガラス小玉（後家山遺跡）

螺旋形鉄鉧（後家山遺跡）



第２図　周辺遺跡位置図

３．調査日誌

令和２年　５月29日　佐久市より２佐道第10号で土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知。

６月２日　長野県教育委員会へ市教育委員会より２佐教文振第1128-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)

６月８日　長野県教育委員会より２教文第８-65号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)

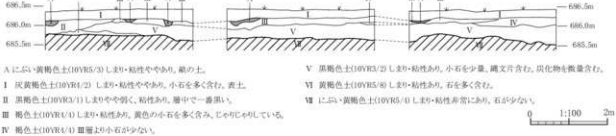
令和２年　８月31日　佐久市道路建設課より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
　　９月７日　市教育委員会より概算調査費の見積について回答。
　　９月10日　佐久市道路建設課より埋蔵文化財発掘調査の実施依頼。
　　11月4日～12月21日　調査区北側より発掘調査を実施する。
　　12月22日～令和３年３月　記録類・出土品の整理業務を開始する。
令和３年　４月16日　本年度の調査について道路建設課より依頼を受け、作業を開始する。
令和４年　３月　記録類・出土品を整理し保管を行い、すべての業務を終了する。

４．遺構・遺物の概要

遺　構　土　坑　13基　　溝状遺構　３本　　畝址　４グループ　　掘立柱建物址　１棟
遺　物　縄文土器(前期・中期)　土師器　須恵器(甕)　土鍋　陶磁器類　石器

５．標準土層

今回の調査地点は北方向に開ける谷地形で、調査部分は谷底面にあたる。このため基本層序は７層に分かれる。山側から押し出された堆積と考えられるⅡ層等があり、場所により複雑な層序を示すと考えられる。図示した土層断面は調査区中央に設定したトレンチ部分の状況である。



第３図　標準土層図

６．調査の方法

遺構調査・遺構測量

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続する№を付け３次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って２分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構№で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインＣを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は1/20で測量実測した図を1/40で修正し、遺物は1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

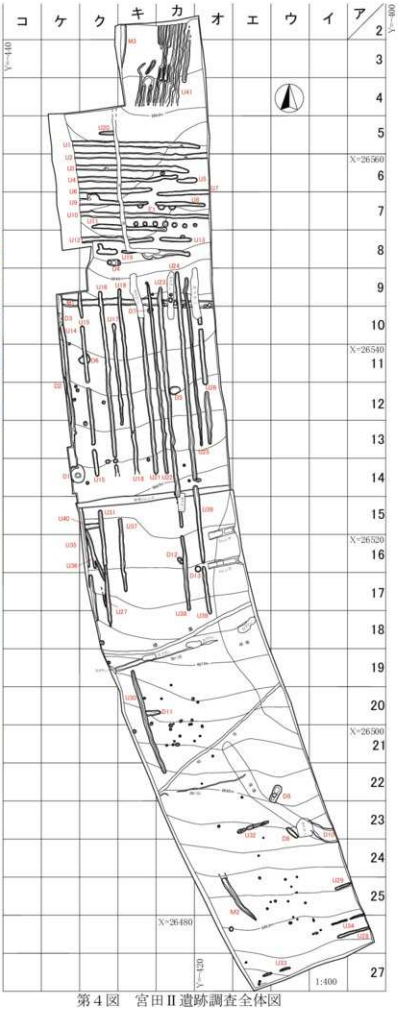
現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるＲＡＷ画質モードと、35㎜一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。

遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、ＥＰＳデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

重機による表土除去作業

遺構検出作業

畝址調査状況



第４図　宮田Ⅱ遺跡調査全体図

第Ⅱ章　遺構と遺物

１．土坑

（1）Ｄ１号土坑

本址は調査地中央のク、ケ－14Grで検出された。一部西側が調査区外となる。形態は円形で、規模は長軸長1.90m、短軸長1.58m、深さ1.94mを測る。壁はほぼ垂直に掘りこまれている。深さ0.40mから石積みが確認された。石は上部が人頭大の大型の礫を使用し、下段はやや小ぶりな礫が利用されていた。控え積みは確認されなかった。礫はいずれも山礫で周辺部より採取された礫と考えられる。本址は形状より井戸としての利用が考えられる。湧水層は地表下約１mにあり、常に深さ１m程は貯水した状態であった。井戸底面は石や木製品の構築は見られず、素掘りの土坑状態であり、粘土層であった。本址からの出土遺物は無かった。

（2）Ｄ２号土坑

本址は調査地中央のケ－11、12Grで検出された。一部西側が調査区外となる。形態は不明で、規模は長軸長1.60m、検出短軸長0.38m、深さ0.65mを測る。覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物は無かった。

（3）Ｄ３号土坑

本址は調査地中央のケ－10Grで検出された。一部西側が調査区外となる。形態は不明で、規模は長軸長1.38m、検出短軸長0.44m、深さ0.46mを測る。覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物は図示した角釘（第14図-33）があった。D2号土坑とＤ３号土坑は規模や形態的に近似し関連が考えられる。

（4）Ｄ４号土坑

本址は調査地北よりのキ、ク－８Grで検出された。形態は楕円形で、規模は長軸長1.40m、短軸長0.64m、深さ0.57mを測る。長軸方位はＮ－87°－Ｗを測る。覆土は単一層であった。掘り方は段を設けており、拳大の自然礫が少量検出された。本址からの出土遺物は図示した不明鉄製品（第14図-34）があった。

（5）Ｄ５号土坑

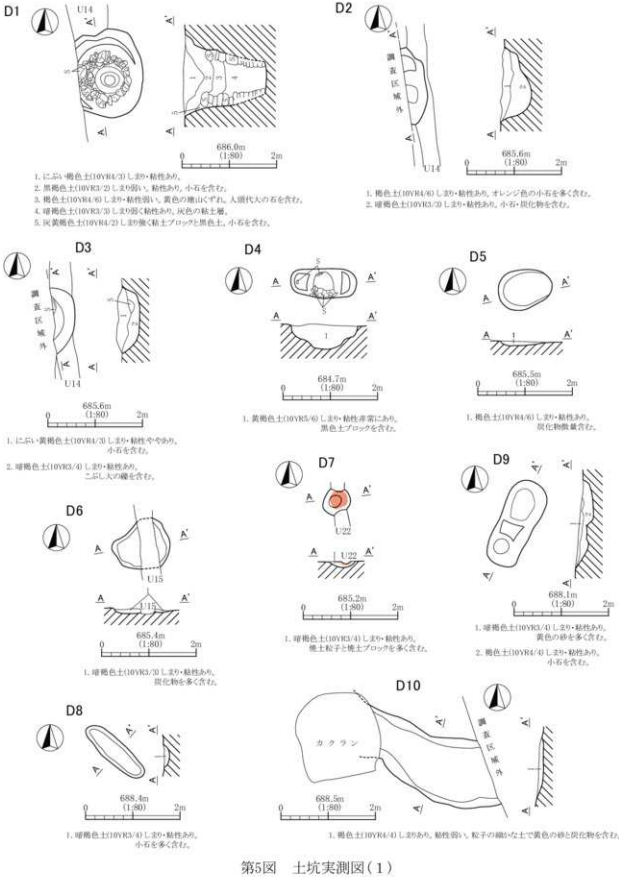
本址は調査地中央のカ－12Grで検出された。形態は楕円形で、規模は長軸長1.12m、短軸長0.82m、深さ0.09mを測る。長軸方位はＮ－75°－Ｅを測る。覆土は単一層であった。本址からの出土遺物は無かった。

（6）Ｄ６号土坑

本址は調査地中央のク、ケ－11Grで検出された。状態は中央をU15畝址に削平されている。形態は不整形で、規模は長軸長1.23m、短軸長1.05m、深さ0.06mを測る。長軸方位はＮ－75°－Ｅを測る。覆土は単一層であった。本址からの出土遺物は無かった。

（7）Ｄ７号土坑

本址は調査地中央のキ－10Grで検出された。状態は上部をU22畝址に一部削平されている。形態は円形で、規模は長軸長0.62m、残存短軸長0.50m、深さ0.14mを測る。長軸方位はＮ－62°－Ｅを測る。覆土は上面がよく焼けており硬質化していた。本址からの出土遺物は無かった。


D1
U14
686.0m
(1:80)
1. にぶい・褐色土(10YR4/3) しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土(10YR3/2) しまり弱い。粘性あり。小石を含む。
3. 褐色土(10YR4/6) しまり・粘性弱い。黄色の地山ぐずれ。人頭代大の石を含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) しまり弱く粘性あり。灰色の粘土層。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強く粘土ブロックと黒色土。小石を含む。
D2
調査区域外
U14
685.6m
(1:80)
1. 褐色土(10YR4/6) しまり・粘性あり。オレンジ色の小石を多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。小石・炭化物を含む。
D3
調査区域外
U14
685.6m
(1:80)
1. にぶい・黄褐色土(10YR4/3) しまり・粘性ややあり。小石を含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。こぶし大の礫を含む。
D4
684.7m
(1:80)
1. 黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性非常にあり。黒色土ブロックを含む。
D5
685.5m
(1:80)
1. 褐色土(10YR4/6) しまり・粘性あり。炭化物微量含む。
D6
U15
685.4m
(1:80)
1. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。炭化物を多く含む。
D7
U22
685.2m
(1:80)
1. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。焼土粒子と焼土ブロックを多く含む。
D8
688.4m
(1:80)
1. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。小石を多く含む。
D9
688.1m
(1:80)
1. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。黄色の砂を多く含む。
2. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性あり。小石を含む。
D10
カクラン
調査区域外
688.5m
(1:80)
1. 褐色土(10YR4/4) しまりあり。粘性弱い。粒子の細いな土で黄色の砂と炭化物を含む。

第5図　土坑実測図（1）

(8)Ｄ８号土坑

本址は調査地南よりのウ－23Grで検出された。形態は楕円形で、規模は長軸長1.55m、短軸長0.46m、深さ0.11mを測る。長軸方位はＮ－50°－Ｗを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(9)Ｄ９号土坑

本址は調査地南よりのウ、エ－22、23Grで検出された。形態は楕円形で、規模は長軸長1.91m、短軸長0.83m、最深部で0.28mを測る。長軸方位はＮ－23°－Ｅを測る。本址の底面は凹凸があり、北側と南側で一段深く掘り窪められていた。本址からの出土遺物は無かった。

(10)Ｄ10号土坑

本址は調査地南よりのイ－23、24Grで検出された。形態は不整形で、北側はカクランにより削平されている。規模は残存長軸長2.60m、短軸長1.42m、最深部で0.10mを測る。長軸方位は不明である。本址は形態から溝状遺構の可能性がある。本址からは土師器坏片が出土したが、小片のため図示できなかった。

(11)Ｄ11号土坑

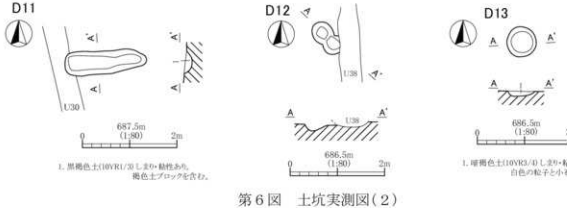
本址は調査地中央のカ、キ－20Grで検出された。形態は楕円形で、西側はＵ30畝址により削平されている。規模は長軸長1.73m、短軸長0.48m、最深部で0.16mを測る。長軸方位はＮ－83°－Ｅを測る。本址は形態からＤ8号土坑と似る。本址からの出土遺物は無かった。

(12)Ｄ12号土坑

本址は調査地中央のカ－16Grで検出された。形態は不整形で、南東側はＵ38畝址により削平されている。規模は残存長軸長0.89m、短軸長0.42m、最深部で0.12mを測る。長軸方位はＮ－40°－Ｗを測る。本址からは図示した縄文土器片(第14図-1)と打製石斧(第14図-24)が出土した。

(13)Ｄ13号土坑

本址は調査地中央のオ－16Grで検出された。形態は円形である。規模は径0.68m、最深部で0.08mを測る。本址からの出土遺物は無かった。



第６図　土坑実測図(２)

２．溝状遺構

(1)Ｍ１号溝状遺構

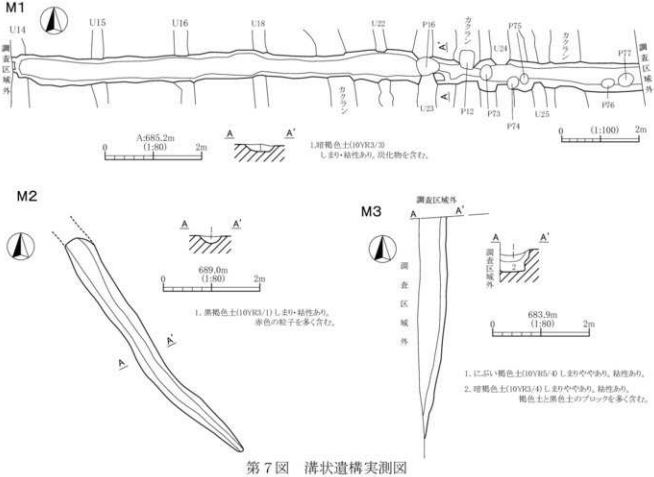
本址は調査地中央北よりのオ～ケ－９、10Grで検出された。東西端が調査区外となる。重複する畝址より古い。形態は断面台形状で、底面は一部凹凸があるが、ほぼ平坦であった。規模は幅0.59～0.78m、深さ0.10～0.24mを測る。検出長は16.22mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。本址からの出土遺物は無かった。

（2）Ｍ２号溝状遺構

本址は調査地南よりのエ、オ－25、エ－26Grで検出された。北側が自然地形により削平されている。形態は断面U字形状で、底面はほぼ平坦であった。規模は幅0.30～0.56m、深さ0.05～0.12mを測る。検出長は5.62mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。本址は土師器片と縄文土器片が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。

（3）Ｍ３号溝状遺構

本址は調査地北端のキ－2、3Grで検出された。北側と西側が調査区域外となる。形態は断面逆台形の形状で、底面はほぼ平坦であった。規模は検出部分で幅0.40～0.58m、深さ0.20～0.40mを測る。検出長は4.50mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。本址覆土からは瓦片や陶器片が出土した。また、図示した第14図-14の土鍋は遺構検出時に本址脇より出土した。



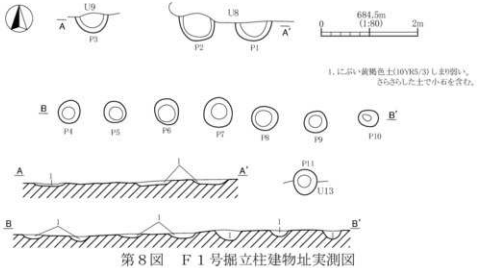
第７図　溝状遺構実測図

３．掘立柱建物址

（1）Ｆ１号掘立柱建物址

本址は調査地北よりのオ～キ－７、カ－８Grで検出された。11箇所のピットを検出したが、畝址と重複するピットはいずれも削平されていた。形態は側柱式と考えられるが、不規則な配置であり確証を得なかった。ピットの規模はP1が径0.76m・深さ0.09m、P2が径0.73m・深さ0.12m、P3が径0.57m・深さ0.08m、P4が径0.48m・深さ0.08m、P5が径0.48m・深さ0.10m、P6が径0.56m・深さ0.08m、P7が径0.61m・深さ0.12m、P8が径0.55m・深さ0.20m、P9が径0.48m・深さ0.16m、P10が径0.41m・深さ0.18m、P11が径0.50m・深さ0.19mを測る。

本址は検出されたピットが浅かったため、削平されたピットの存在を考え「掘立柱建物址」としたが畝址と軸を同じくすることなどから、何らかの生産址的な遺構とも考えられる。本址からの出土遺物は無かった。



第８図　Ｆ１号掘立柱建物址実測図

４．畝　址

今回の発掘調査で畝址と考えられる遺構が発見された。それぞれの畝址は調査区内でまとまりがあり、そのまとまりをもとに４つのグループに分けそれぞれの詳細について記載する。なお畝と畝の間の掘りこまれた部分を「畝間」として記載する。

（１）Ａグループ(U1～13、U19・20)

本グループは調査区中央北よりで検出された。畝の掘削方向はほぼ東西方向である。15m四方の範囲から11状の畝を検出した。各畝はほぼ等間隔に配置され、畝間は一部途切れる部分もあるが連続した溝状の掘り込みである。畝間の底面はほぼ平坦であった。

（２）Ｂグループ(U14～18、U21～27、U31、U35～40)

本グループは調査区中央よりで検出された。畝の掘削方向はほぼ南北方向である。17×37m四方の範囲から、14状の畝を検出した。各畝はほぼ等間隔に配置されていたが、U36とU40は方向が異なっている。畝間は一部途切れる部分もあるが連続した溝状の掘り込みである。畝間の底面はほぼ平坦であったが、掘り込みは浅いものと深いものがあった。

また、本グループは表土からの断面調査の結果、掘り込みの層序が異なり、畝間はほぼ並行しているが二時期に分かれることが観察できた(第10図セクション図参照)。

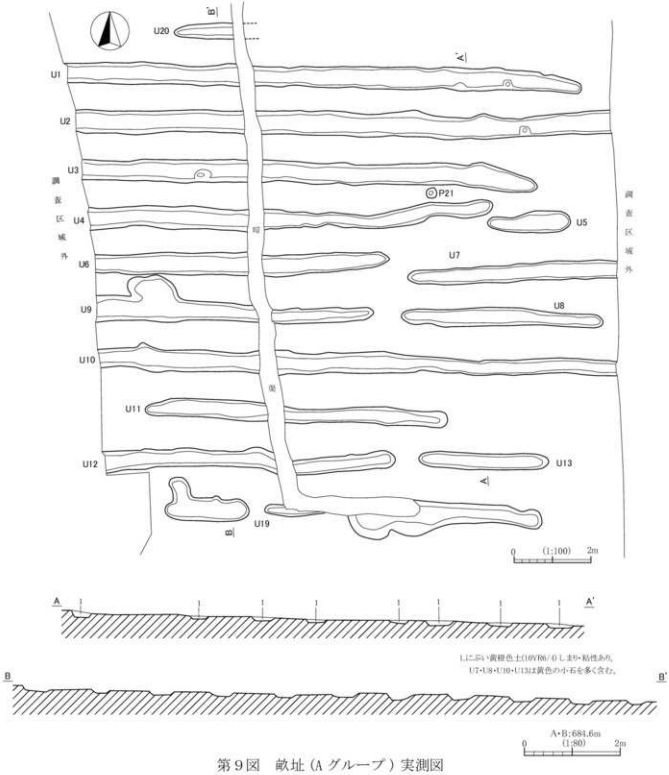
（３）Ｃグループ(U28・29、U32～34)

本グループは調査区南端で検出された。畝の掘削方向はほぼ東西方向である。15m四方の範囲から５状の畝間を検出したが、上部が削平されているのかほとんどが細切れの状態であった。また、畝間の底面はほぼ平坦であったが、U32のみ底面掘り方の凹凸が激しく、性格を異にする畝間かも知れない。

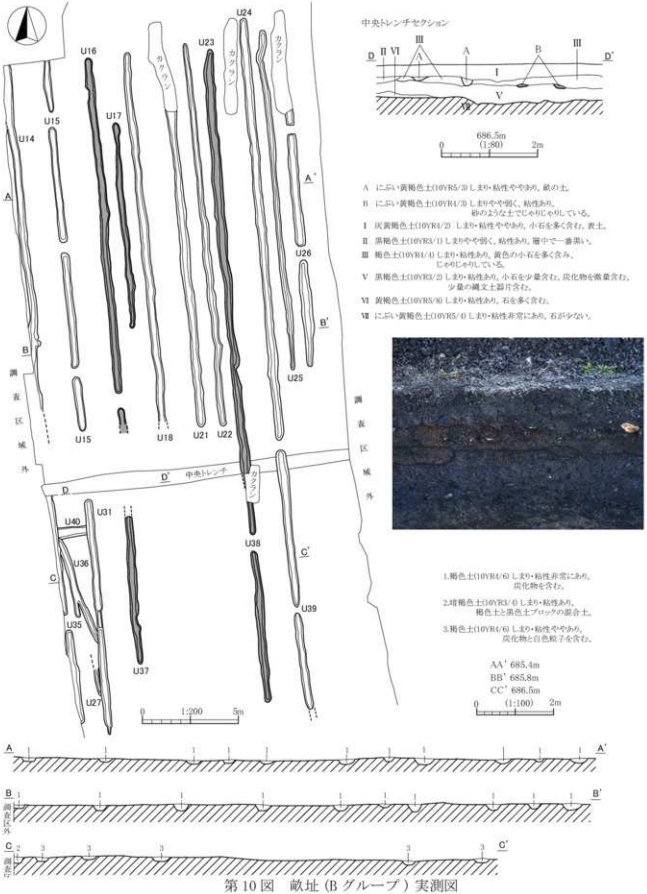
（４）Ｄグループ(U41)

本グループは調査区北端で検出された。畝の掘削方向は北東から南西方向に掘削されている。10m四方の範囲から４状の畝を検出した。本グループの畝は他のグループと形態が異なり、畝と畝間が非常に近接し、また直線的な掘り方ではないのが特徴である。畝間からは図示できなかったが土師器片

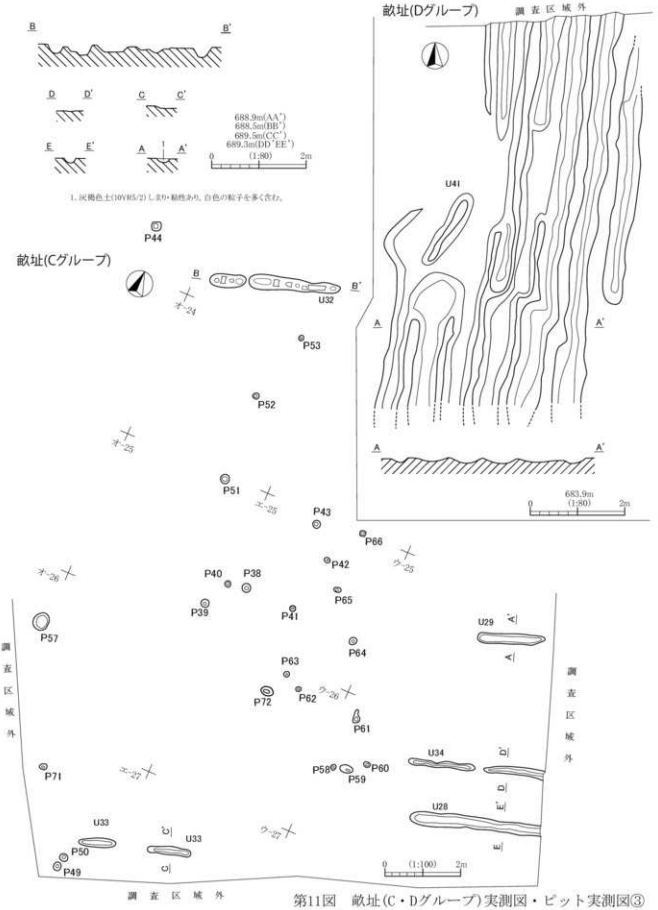
や土鍋片が出土した。
　なお、本畝址は宮田遺跡で検出された畝址と形状が非常によく似ている。



第９図　畝址（Ａグループ）実測図



第10図　畝址（Bグループ）実測図



第11図　畝址(C・Dグループ)実測図・ピット実測図③

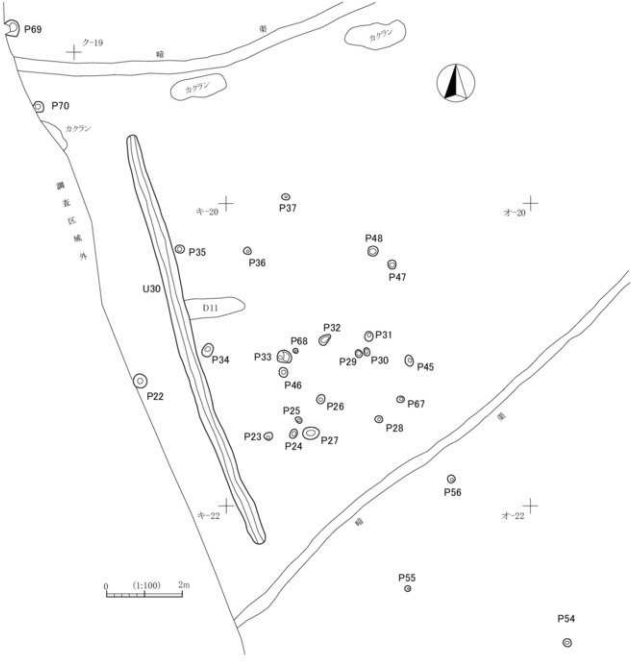
第１表　畝址計測表

（）推定　＜ ＞残存　単位 m

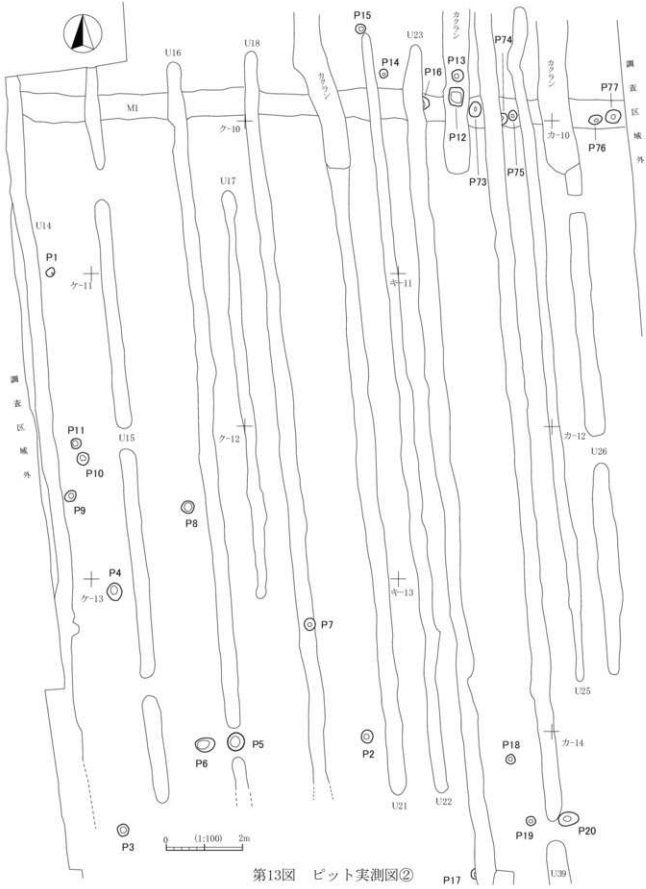
遺構名	出土位置	検出長	幅	深さ	出土遺物	重複関係
U1	オ・カ・キ・ク・ケ-5	＜13.37＞	0.38～0.60	0.08～0.14	土師器甕片	
U2	オ・カ・キ・ク・ケ-5・6	＜13.89＞	0.45～0.70	0.05～0.14	土師器甕片	
U3	カ・キ・ク・ケ-6	＜11.80＞	0.42～0.66	0.06～0.13	土師器甕片	
U4	カ・キ・ク・ケ-6	＜10.42＞	0.30～0.58	0.04～0.15		
U5	オ・カ-6	2.16	0.33～0.56	0.07～0.10		
U6	キ・ク・ケ-6・7	＜7.65＞	0.40～0.58	0.06～0.10		
U7	オ・カ-6・7	＜5.44＞	0.36～0.50	0.06～0.09		
U8	オ・カ・キ-7	5.25	0.35～0.50	0.05～0.08		F1より新
U9	キ・ク-7	＜7.14＞	0.33～1.24	0.06～0.10	土師器甕片	F1より新
U10	オ・カ・キ・ク-7	＜13.40＞	0.36～0.68	0.07～0.15		
U11	カ・キ-7・8 、ク-7	7.84	0.35～0.52	0.07～0.12		
U12	キ・ク-8	＜7.50＞	0.38～0.55	0.07～0.11		
U13	カ-8	3.36	0.40～0.43	0.12～0.16	土師器甕片	F1より新
U19	カ・キ・ク-8	9.38	0.26～1.12	0.07～0.20		
U20	ク-5	＜1.53＞	0.34～0.41	0.07～0.08		
U14	ケ-9・10・11・12・13・14	＜18.00＞	0.35～0.64	0.10～0.14	縄文片	M1より新
U15	ク-9・10・11・12・13・14 ケ-9・10	＜19.40＞	0.29～0.45	0.06～0.15	陶器碗	D6・M1より新
U16	キ-14 ク-9・10・11・12・13・14	＜18.45＞	0.32～0.50	0.07～0.17		M1より新
U17	キ-11・12・13 ク-10・11・12	10.77	0.20～0.47	0.04～0.09		
U18	キ-9・10・11・12・13・14 ク-9	＜19.30＞	0.29～0.46	0.06～0.14	縄文片・石鏃	M1より新
U21	カ-13・14 キ-10・11・12・13・14	＜16.50＞	0.37～0.50	0.11～0.17	縄文片	
U22	カ-10・11・12・13・14 キ-9・10・11	20.01	0.25～0.45	0.04～0.12		D7・M1より新
U23	カ-9・10・11・12・13・14・15	25.32	0.27～0.55	0.08～0.21	縄文片	M1・P16・P17より新
U24	オ-13・14 カ-9・10・11・12・13・14	22.03	0.40～0.52	0.08～0.15		M1・P74より新
U25	オ-11・12・13 カ-9・10・11・12	17.73	0.16～0.40	0.03～0.15		M1より新
U26	オ-10・11・12・13	＜12.12＞	0.39～0.60	0.06～0.15		
U27	ク-17	＜1.40＞	0.20～0.24	0.04		U31より古
U31	ク-15・16・17・18	12.28	0.27～0.45	0.04～0.14		U27・U36・U40より新
U35	ク-15・16・17・18	＜11.17＞	0.33～0.42	0.10～0.18		U36・U40より新
U36	ク-15・16・17	＜5.57＞	0.23～0.45	0.05～0.13		U40より新、U31・U35より古
U37	キ-15・16・17	＜7.70＞	0.38～0.44	0.07～0.11		
U38	カ-16・17・18	7.91	0.34～0.46	0.08～0.12		
U39	オ-14・15・16・17・18 カ-14・15	13.24	0.37～0.50	0.03～0.13		
U40	ク-15	＜1.55＞	0.48～0.55	0.06～0.08		U31・U35・U36より古
U28	ア・イ-26	＜3.44＞	0.30～0.36	0.10～0.15		
U29	ア・イ-25	1.76	0.24～0.27	0.06～0.09		
U32	エ-23	3.37	0.25～0.38	0.01～0.20	土師器片	
U33	ウ・エ-27	3.00	0.19～0.23	0.01～0.03		
U34	ア-25・26、イ-26	＜3.31＞	0.13～021	0.01～0.03		
U41	① カ-2・3・4	＜5.54＞	0.37～0.50	0.08～0.13		
	② カ-2・3・4	＜8.40＞	0.33～0.70	0.07～0.19		
	③ カ-2・3・4、キ-4	＜8.27＞	0.93～1.33	0.05～0.15		
	④ カ-2・3・4、キ-3・4	＜8.34＞	0.66～2.67	0.05～0.12		
U30	カ-21・22 キ-19・20・21	11.35	0.35～0.47	0.03～0.17		D11より新

5．ピット

今回の発掘調査では77個のピットが検出された。これらピットはいずれも小型の円形を基調とするもので、掘立柱建物址や杭列を想定できるものは無かったが、検出位置に地点的な偏りは指摘できた。第12図に示したエリアは比較的にピットがまとまって検出され、覆土も共通するピットが多かった。規模はいずれも小型であり、深さも浅いものが多いため建物址を想定するには至らなかったが、何らかの構築物が存在した可能性がある。



第12図　U30畝址・ピット実測図①



第13図　ピット実測図②

第２表　ピット計測表

（ ）推定　＜ ＞残存　単位 m

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物重複関係	備　　考	遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物重複関係	備　　考
P1	ケ-10・11	0.27	0.21	0.34	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P38	ウ-25	0.24	0.24	0.14	円形		黒色土(10YR2/1)
P2	キ-13・14	0.36	0.31	0.19	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P39	エ-25	0.22	0.22	0.14	円形		黒色土(10YR2/1)
P3	ク-14	0.33	0.30	0.10	円形		褐色土(10YR4/4)	P40	ウ・エ-25	0.17	0.17	0.24	円形		黒色土(10YR2/1)
P4	ク-13	0.43	0.37	0.14	楕円形		褐色土(10YR4/4)	P41	ウ-25	0.16	0.15	0.09	円形		黒色土(10YR2/1)
P5	ク-14	0.48	0.45	0.16	円形		褐色土(10YR4/4)	P42	ウ-25	0.16	0.15	0.06	円形		黒色土(10YR2/1)
P6	ク-14	0.51	0.38	0.32	楕円形		褐色土(10YR4/4)	P43	ウ-25	0.21	0.20	0.14	円形		黄褐色土(10YR6/6) 黄色い粘土層　柱痕
P7	キ-13	0.32	0.31	0.21	円形	U18より古	褐色土(10YR4/4)								
P8	ク-12	0.32	0.31	0.11	円形		褐色土(10YR4/4)	P44	オ-23	0.30	0.25	0.14	方形		黄褐色土(10YR6/6)
P9	ク-12	0.34	0.28	0.15	楕円形		褐色土(10YR4/4) 黄色の石含む	P45	オ-21	0.29	0.22	0.27	楕円形		黒色土(10YR2/1)
								P46	カ-21	0.27	0.24	0.17	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P10	ケ-12	0.34	0.32	0.11	円形		褐色土(10YR4/4) 黄色の石含む	P47	オ-20	0.25	0.23	0.26	方形		黒色土(10YR2/1)
								P48	オ・カ-20	0.28	0.27	0.12	円形		黒色土(10YR2/1)
P11	ケ-12	0.27	0.23	0.08	楕円形		褐色土(10YR4/4) 黄色の石含む	P49	エ-27	0.23	0.21	0.11	円形		黒色土(10YR2/1)
								P50	エ-27	0.23	0.20	0.10	円形		黒色土(10YR2/1)
P12	カ-9	0.55	0.42	0.22	方形		褐色土(10YR4/4)	P51	エ-24・25	0.25	0.24	0.08	円形		黒色土(10YR2/1)
P13	カ-9	0.32	0.32	0.12	円形		褐色土(10YR4/4)	P52	エ-24	0.18	0.16	0.14	円形		黒色土(10YR2/1)
P14	キ-9	0.24	0.22	0.13	円形		黒色土(10YR2/1)	P53	エ-23	0.17	0.13	0.60	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P15	キ-9	0.27	0.26	0.16	円形		黒色土(10YR2/1)	P54	エ-22	0.23	0.20	0.12	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P16	カ-9	0.62	0.48	0.17	楕円形	U23より古	褐色土(10YR4/4)	P55	オ-22	0.17	0.17	0.14	円形		黒色土(10YR2/1)
P17	カ-14	0.28	0.21	0.14	円形	U23より古	褐色土(10YR4/4)	P56	オ-21	0.22	0.21	0.16	円形		黒色土(10YR2/1)
P18	カ-14	0.25	0.25	0.16	円形		褐色土(10YR4/4)	P57	エ・オ-26	0.48	0.40	0.18	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P19	カ-14	0.27	0.24	0.09	円形		黒色土(10YR2/1)	P58	イ-26	0.17	0.16	0.08	円形		黒色土(10YR2/1)
P20	オ-14	0.53	0.36	0.12	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P59	イ-26	0.36	0.20	0.21	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P21	カ-6	0.46	0.34	0.17	楕円形		黒色土(10YR2/1) 炭化物含む	P60	イ-26	0.20	0.15	0.11	方形		黒色土(10YR2/1)
								P61	イ-26	0.35	0.18	0.12	不整形		黒色土(10YR2/1)
P22	キ-21	0.37	0.37	0.26	円形		褐色土(10YR4/4)	P62	ウ-26	0.16	0.13	0.11	円形		黒色土(10YR2/1)
P23	カ-21	0.23	0.20	0.18	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P63	ウ-26	0.16	0.14	0.14	円形		黒色土(10YR2/1)
P24	カ-21	0.25	0.18	0.20	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P64	ウ-25	0.22	0.19	0.14	円形		黒色土(10YR2/1)
P25	カ-21	0.19	0.15	0.23	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P65	ウ-25	0.22	0.14	0.13	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P26	カ-21	0.26	0.21	0.12	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P66	ウ-24・25	0.20	0.18	0.11	方形		黒色土(10YR2/1)
P27	カ-21	0.45	0.33	0.15	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P67	オ-21	0.21	0.18	0.11	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P28	オ・カ-21	0.21	0.18	0.11	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P68	カ-20	0.15	0.14	0.11	円形		黒色土(10YR2/1)
P29	カ-20・21	0.23	0.20	0.11	円形		黒色土(10YR2/1)	P69	カ-18	0.86	0.40	0.40	円形		褐色土(10YR4/4)
P30	カ-20・21	0.23	0.15	0.11	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P70	ク-19	0.30	0.28	0.40	円形		褐色土(10YR4/4)
P31	カ-20	0.27	0.23	0.13	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P71	エ-27	0.21	0.16	0.10	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P32	カ-20	0.35	0.21	0.15	不整形		黒色土(10YR2/1)	P72	ウ-26	0.36	0.24	0.13	楕円形		黒色土(10YR2/1)
P33	カ-20・21	0.38	0.28	0.38	不整形		黒色土(10YR2/1)	P73	カ-9	0.41	0.31	0.19	楕円形		褐色土(10YR4/4)
P34	キ-20・21	0.37	0.28	0.27	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P74	カ-9・10	0.37	0.28	0.12	楕円形	U24より古	褐色土(10YR4/4)
P35	キ-20	0.25	0.21	0.11	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P75	カ-9・10	0.27	0.22	0.08	楕円形		褐色土(10YR4/4)
P36	ク-20	0.21	0.19	0.13	円形		黒色土(10YR2/1)	P76	オ-9・10	0.34	0.23	0.10	楕円形		褐色土(10YR4/4)
P37	ク-19	0.22	0.17	0.10	楕円形		黒色土(10YR2/1)	P77	オ-9・10	0.42	0.36	0.10	楕円形		褐色土(10YR4/4)

６．出土遺物

今回の発掘調査では検出された遺構が生産遺構ということもあり、調査面積に比較して出土遺物は少量であったが、図化できる資料は36点あった。

１～12は縄文土器片である。いずれも小片であったが前期と中期を主体とする時期が確認された。１と２、５と６はいずれも縄文施文の土器片で、原体は単節縄文と考えられるが、摩耗が激しく判然としない。２と６は羽状構成をとると考えられる。１は口唇部が折り返し口縁となる。３と４は胴部下半の破片で文様が施文されるのか、無文部位なのかわからない。１から６の土器片はこれらの特徴から前期前半に帰属すると考えられる。７と８はいずれも細い半裁竹管による集合沈線で構成され、これらの特徴から前期後半の諸磯C式に比定される。９と10は沈線が施されている。特に10は鱗状の施文か。11と12は縄文施文後に沈線及び半隆帯による区画が行われている。特徴から中期後半の加曽利E式の範疇として捉えられる。13は須恵器甕の胴部破片で、外面にタタキ、内面にナデが確認できる。14は土鍋である。底部と口唇部を欠損する。胴部下半は黒く煤けている。15と16は近世陶磁器で、い

第 14 図　出土遺物実測図

ずれも染付が施される。15は手書きで16はプリントによる彩色と考えられる。17～19はいずれも無茎石鏃で、17のみほぼ完形である。20も石鏃の範疇として考えられるが大型品である。21は側面に使用痕が確認できる剥片である。23と24は打製石斧の一部で、いずれも短冊形の欠損品である。両側面に刃部加工がある。28と29は磨り石で、礫全体が磨りこまれている。30～32は敲き石で、特に30は上下に敲き痕、片面に磨り痕が確認できる。33と34は鉄製品で、いずれも欠損しており全容は不明。35は銅製のキセル吸口部で、内部に一部木質部が残存している。
36は欠損しているが、鉛玉と考えられる。その形状から鉄砲玉の使用が考えられる。

第 3 表　出土遺物観察表

（ ）推定 〈 〉残存　cm　g

	種別	器種	法量			成形・調整・文様・機考		実測方法	出土位置
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面		
1	縄文	深鉢	－	－	－		単節縄文?施文	破片実測	D12
2	縄文	深鉢	－	－	－		縄文施文	破片実測	ケン中段
3	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	破片実測	ケン中段
4	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	破片実測	ケン上段
5	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	縄文施文	破片実測	ケン中段
6	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	縄文施文	破片実測	中段 トレンチ 黒色土
7	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	細い半截竹管による集合沈線	破片実測	ケン中段
8	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	細い半截竹管による集合沈線	破片実測	
9	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	沈線	破片実測	
10	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	沈線	破片実測	暗栗中段
11	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	縄文施文の後、区画沈線及び平行線	破片実測	ケン上段
12	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	縄文施文と区画沈線	破片実測	ケン上段
13	須恵器	甕	－	－	－	ハケ目の残るナデ	タタキ目	破片実測	暗栗上段 ケン上段
14	土師質	鍋	－	(28.0)	〈15.9〉	ヨコナデ	ヨコナデ	回転実測	ヤ-3
15	陶磁器	碗	(7.4)	－	〈5.1〉	染付・施釉	染付・施釉	回転実測	ケン上段 暗栗
16	磁器	皿	10.9	6.3	2.3	染付・施釉	施釉	回転実測	ケン中段

No	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
17	石鏃	チャート	1.95	1.30	0.35	0.74	被熱なし	オ-22
18	石鏃	チャート	〈1.55〉	〈1.40〉	〈0.30〉	〈0.76〉	被熱なし 先端・脚部欠損	U18
19	石鏃	黒曜石	〈1.90〉	〈1.15〉	〈0.25〉	〈0.41〉	被熱なし 約1/2欠損	試掘 11トレ
20	石鏃	チャート	〈4.90〉	〈1.75〉	〈0.40〉	〈2.24〉	被熱なし 片脚欠損	試掘2トレ
21	剥片	黒曜石	3.90	2.80	0.50	7.22	被熱なし 使用痕あり	試掘7トレ
22	石鏃未成品	黒曜石	3.40	2.50	0.85	6.02	黒曜石 被熱なし	ケン中段
23	打製石斧		〈11.4〉	〈6.3〉	〈1.7〉	〈246.98〉	被熱なし 刃部欠損	ヤ-4
24	打製石斧		〈4.1〉	〈6.0〉	〈0.7〉	〈26.82〉	被熱なし 上下欠損	D12
25	剥片石器		8.80	5.90	1.70	85.09	被熱なし 側辺に剥離痕 自然面残る	ケン中段
26	磨製石斧		〈6.1〉	〈5.1〉	〈0.9〉	〈32.36〉	被熱なし 側面と正面の一部のみ残存 擦痕残る	暗栗中段
27	不明		〈9.6〉	〈6.5〉	〈1.0〉	〈63.32〉	被熱なし 上下欠損 正面は自然面	ケン上段 暗栗
28	磨石		4.00	3.10	0.70	11.28	被熱なし 全体にすり	ケン上段
29	磨石		〈4.6〉	〈3.8〉	〈1.4〉	〈36.99〉	被熱なし 上部欠損 全体にすり 側辺にすり面	ケン中段
30	敲・敲石		9.00	6.10	3.40	253.73	被熱なし すり面1 両端部に敲打痕	ケン中段
31	凹石		6.00	6.60	5.40	296.67	被熱なし 凹径1.2～1.5 凹深0.1	暗栗下段
32	敲石		〈5.2〉	〈7.8〉	〈5.1〉	〈273.96〉	被熱なし 下部欠損 端部に敲打痕	暗栗下段
33	角釘	鉄製品	〈8.4〉	〈0.9〉	〈0.9〉	〈12.75〉	両端欠損	D3
34	不明	鉄製品	〈4.8〉	〈1.5〉	〈0.9〉	〈5.90〉	先端欠損 V字状	D4
35	煙管	銅製品	8.90	1.20	1.20	16.34	素材の厚3.0.1～0.2 推定値 木質のこる	ケン上段 畑段
36	鉄砲玉?	鉛製品	〈1.15〉	〈1.20〉	〈1.00〉	〈7.92〉	一部欠損	カ-3

第Ⅲ章　調査のまとめ

今回の発掘調査は北側に開けた小さな谷地形の底部を調査したことになる。結果、畝址を中心に井戸址等の遺構が検出された。各遺構からの出土遺物が希薄なため確定的な時期決定には至らなかったが、出土遺物は縄文土器片、古代の土師器・須恵器片、中世の土鍋等が出土していることから、これらのいずれかの時期に該当していくと考えられる。特にここでは調査の成果として、畝址について隣接する宮田遺跡の調査事例と比較しながら検討し調査のまとめとしたい。

畝址は第Ⅱ章でも触れたが、検出された軸の向きと、地点のまとまりから４ヵ所のグループに分類した。いわゆる東西に軸を持つＡグループとＣグループ、南北方向に軸を持つＢグループ、北東方向と南西方向に軸をもつＤグループである。このうちＡグループからＣグループは掘削方向は90°異なるが、畝間掘削幅や掘り方が似ており現地籍図と区画や範囲が重なる部分が多いことから近世から近代にかけての掘削痕と考えられる。ちなみに現地権者や周辺耕作者からの聞き取り調査では、井戸址や確認された畝址についてはその存在や耕作した記憶はなかった。このことからこれら畝址は、出土遺物も摩耗した古代の土師器片がほとんどで、陶磁器類やビニール等が含まれないことから近世に近い帰属年代を推定する。

これらと対比してＤグループの畝址は、掘削軸方向や形状が先の３ヵ所のグループとは異なる。特に掘り方は畝間が非常に近接し、また一本一本が曲がったり統合したりといった状況であった。このような畝址は近接する宮田遺跡の２号畝址と形態が酷似する。２号畝址は約20㎝の間隔で33本前後の畝が検出され、出土遺物や重複遺構から帰属時期は14世紀後半～15世紀前半より若干新しい時期と考えられている。図示した本畝址の確認面より出土した土鍋は15～16世紀代の時期が与えられる事から、本畝も宮田遺跡２号畝址とほぼ同時代の中世後期の構築が考えられる。

今回の調査で発見された畝址について概略をまとめたが、これらのことから宮田Ⅱ遺跡の範囲は中世から近世にかけての畑作を行った生産遺跡として位置づけられると考える。井戸等も検出されていることから集落域も近接して伴っていると考えられるが、今回は確認できなかった。隣接する宮田遺跡の遺構配置を参考とすれば、今回の調査地点より北側、いわゆる谷の出口側に立地している可能性が大きい。

最後に今回の調査では上記に記した成果を一部報告したが、先の後家山遺跡、宮田遺跡、東久保遺跡といった周辺部の調査事例と総合的に考察することにより、瀬戸地籍の歴史的な景観が語れる部分が見出せつつあると考える。今後の調査・研究の深化を期待したい。

調査区を南側より望む　（遠方の山並みは右より浅間山・剣ヶ峰・黒斑山・高峰山・湯の丸山）

図版　1

調査区全景（西より）

Ｄ１号土坑

Ｄ１号土坑石積

Ｍ１号溝状遺構

D 2 号土坑

D 6 号土坑

D 3 号土坑

D 7 号土坑

D 4 号土坑

D 8 号土坑

D 5 号土坑

D 9 号土坑

図版　3

D 10 号土坑

D 12 号土坑

D 11 号土坑

D 13 号土坑

M 2 号溝状遺構

M 3 号溝状遺構

F 1 号掘立柱建物址

畝址 D グループ（西より）

畝址 B グループ（北より）

図版　5

畝址Ａグループ（北より）

畝址Ａグループ（東より）

14-1
14-2
14-3
14-4
14-5
14-6
14-7
14-8
14-9
14-10
14-12
14-11
14-17
14-18
14-19
14-22
14-20
14-21
14-14
14-13
14-24
14-23
14-15
14-35
14-25
14-26
14-27
14-16
14-33
14-34
14-36
14-30
14-31
14-32
14-28
14-29
13～16、23～32　(1：4)
1～12　(1：3)
33～36 (1：2)
17～22 (1：1)

報告書抄録

ふりがな	みやたにいせき
書　名	宮田Ⅱ遺跡
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第285集
編著者名	冨沢　一明
編集機関	佐久市教育委員会　社会教育部　文化振興課
所 在 地	長野県佐久市中込2913　TEL0267-63-5321　FAX0267-63-5322
発行年月日	2022年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
みやたにいせき 宮田Ⅱ遺跡	さくしせと 佐久市瀬戸 2374-17 ほか	20217	332	36°14.20	139°49.43	20201104 ～ 20201221	1800	土砂搬出 場整備 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮田Ⅱ遺跡	散布地	縄文 中世	畝 址　4箇所 掘立柱建物址 1棟 溝状遺構　3本 土 坑　13基	縄文土器 土師器 須恵器 陶磁器類 土鍋・石製品	

要 約	北側に開く谷地形を発掘調査した。その結果、帰属時期が異なると考えられる畝址を検出し、それに伴う井戸址を調査した。これらの遺構は西側に隣接する宮田遺跡と関連があると考えられた。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第285集
宮田Ⅱ遺跡
2022年　3月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
社会教育部　文化振興課　文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込2913
℡0267-63-5321
印刷所　　キクハラインク有限会社